

こう ふ じょう か まち
甲府城下町遺跡

都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年3月

山梨県教育委員会
山梨県土整備部



エリア1 北側 江戸1期 磚石、石臼炉



エリア1 北側 東面の基本土層



エリア1 南側 江戸4期 磁石、配石



エリア1 南側 江戸1期 磁石



エリア2 基本土層



エリア2 東側
土蔵の基礎



エリア1 北側 金精錬のための石臼炉



炉に埋設された石臼



土器に付着した金粒



フイゴ羽口に金粒が付着している

序 文

本書は都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴い、甲府城下町遺跡に該当する城東通り（国道411号）に沿った箇所の試掘調査を実施し、その結果を受けて平成23年度に発掘調査をおこなった報告です。

甲府城下町遺跡における今回の調査地点は、甲府市の中心に位置する甲府城に伴う三の堀に囲まれた町屋に該当するところで、甲府城中心部からみて南東の方向にあたります。

調査の結果、甲府城下町に伴う江戸時代前半期を中心とした遺構・遺物がみられました。城東通りをはさんだ北側の調査区では、江戸時代の文化層が4枚みつかり、江戸時代の地盤造成層をはさんだ上層と下層に大きく分かれます。造成層下の生活面では、床に埋設された石臼とその周囲から出土した土器に金粒や銀・鉛などが検出され、金の精錬に係る遺構・遺物を発見しました。調査地点は、一部の史料から江戸時代の金座に近いところであることがわかつており、こうした金の生産に係わる資料が発掘調査で確認することができたことは大きな成果でした。

また、江戸時代の地盤造成やその後の状況など、調査区域はせまかったにもかかわらず、陶磁器類をはじめとする多くの出土品があり、甲府城下町での生活の様相の一端が明らかとなりました。生活は、明治期以降近代を経て現在まで続いておりますが、こうした近世から現代までの激動の歴史も残されていることがわかりました。

これまで甲府中心部は県庁防災新館をはじめ甲府市役所などいくつかの公官庁の建設に伴い、甲府城及びその城下町の様相が少しずつ明らかとなってきました。こうした発掘調査成果とともに本書が、甲府市中心市街地さらには本県の歴史・文化財に関する学習や研究において、貢献できることを祈ってやみません。

最後に、山梨県県土整備部をはじめとする調査にあたってご協力いただいた甲府市教育委員会など関係者、関係機関に厚く御礼を申し上げます。

2013年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 八卷 與志夫

例　　言

- 1 本書は、山梨県甲府市中央二丁目、四丁目に存在する甲府城下町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査であり、山梨県土整備部より山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
- 3 発掘調査および整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが行った。
- 4 本書の執筆・編集は今福利恵、御山亮済がおこなった。
- 5 発掘調査・整理作業及び本書の刊行にあたり、測量基準点を昭和測量株式会社に委託し、遺物の理化学分析については山梨県立博物館の協力を得た。
- 6 遺跡における遺構、遺物写真の写真は今福利恵、土橋寛仁が行った。
- 7 本書にかかる記録図面、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 調査にあたり、次の方々からご教示、ご協力をいただいた。記して謝意を表する。齊名貴彦 信藤裕仁 志村憲一 平塚洋一 甲府市教育委員会 山梨県立博物館

凡　　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は図中に示した。基本土層1/60、遺構は1/30、遺物については1/3、石臼は1/6、錢貨は1/2としている。
- 2 調査区内は世界測地系座標に基づく5m四方のグリッドを示しているが、狹小な調査区のためグリッド名は付していない。また全体図におけるX・Y軸延長線上の数値は座標線の数値で、南北のグリッド線及び図中の北印は真北を指す。
- 3 遺構断面図の左側基点に付した数字は標高(m)を表す。
- 4 図版中に示したスクリーントーンは以下の内容を示す。
■須恵器、■焼土・被熱範囲、金付着範囲・炭化・漆範囲
- 5 遺物観察表の括弧付き数値は推定値である。

目 次

巻頭写真図版

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の目的と課題	1
第3節 発掘調査の経過	1
第4節 室内調査の経過	1
発掘調査にかかる手続き等	2
調査組織	2
第2章 遺跡周辺の環境と歴史	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	6
第1節 発掘調査の方法	6
第2節 基本層序	6
第3節 発見された遺構	7
遺構図版	9
第4節 発見された遺物	15
遺物図版	18
陶磁器類観察表	25
特殊遺物観察表	26
錢貨計測表	26
第4章 総 括	27
写真図版	

図 版 目 次

第1図 調査位置図	5
第2図 調査区域図	9
第3図 エリア1 江戸期全体図	10
第4図 エリア1 江戸1期遺構図	11
第5図 エリア1 江戸4期遺構図	12
第6図 エリア1 近代全体図	13
第7図 エリア2 全体図	14
第8図 出土遺物 陶磁器類(1)	18
第9図 出土遺物 陶磁器類(2)	19
第10図 出土遺物 陶磁器類(3)	20
第11図 出土遺物 陶磁器類(4)	21
第12図 出土遺物 陶磁器類(5)	22
第13図 出土遺物 陶磁器類(6)、石製品、金属製品、錢貨	23
第14図 出土遺物 木製品・木質遺物	24

表 目 次

第1表 陶磁器類観察表	25
第2表 特殊遺物観察表	26
第3表 錢貨計測表	26

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

甲府城下町遺跡における都市計画道路（甲府市川三郷線）において地中電線共同溝埋設工事に先立ち、地中埋設物の確認を行うための掘削が行われることとなり、平成23年1月6日～19日にかけて立会調査を実施した。東西方向に走る城東通り（国道411号和戸町山宮島上条線）では、道路南側沿いに150mの範囲に5箇所、南北方向の遊亀通り（県道3号古府中環状浅原橋線）では150mの範囲に3箇所である。調査の結果、遊亀通りの2箇所から江戸期と思われる焼土層や陶磁器片が認められた。

平成23年4月26日には、街路事業を原因として、現状の城東通り（国道411号）の拡幅に伴い新規に取得した事業用地について埋蔵文化財の取扱いを協議し、平成23年5月19日～20日にかけて当該地點に6箇所の試掘トレンチを設定して試掘確認調査を行った。このうち3箇所の試掘トレンチから、江戸時代の文化層が確認された。この結果から同年6月3日に今後の埋蔵文化財保護の対応を図るために協議を行った。年度内に調査を実施することで調整し、同年7月11日に山梨県埋蔵文化財センターを含めた協議を行い、対象地約90m²を同年10月から1ヶ月の期間で発掘調査を行うこととなった。

第2節 調査の目的と課題

甲府城下町遺跡（古府中環状浅原橋線）は江戸時代の生活面、遺物を記録保存することを目的とする。近代の市街地化とともにすでに削平されてしまった箇所も多く、こうした中の本調査地點における江戸時代の生活面の確認は貴重である。また、甲府城下町遺跡においても主要街道沿いであり、ここでの生活土地利用の変遷過程を解明していくための資料として、江戸時代各細時期の遺構・遺物をとらえていくことを課題とする。

第3節 発掘調査の経過

平成23年5月の試掘調査の結果を受けて、年度内には発掘調査を実施する方向となった。同年7月11日に山梨県県土整備部中北建設事務所、県教育庁学術文化財課、埋蔵文化財センターの三者で発掘調査の実施時期と方法を協議した。10月から一ヶ月の調査期間で実施することとし、調査計画及び経費について確認することになった。調査計画に基づいて同年9月13日に実務的な現地協議を同三者にて行った。

本調査は平成23年10月14日に重機を用いて城東通り北側のエリア1とした箇所の表土除去作業を行った。10月17日から人力による掘削を開始し、翌19日には基準杭測量及びベンチマーク設置を行った。11月2日にエリア1の調査を終えて埋め戻しを行い、あわせて城東通り南側のエリア2とした箇所の表土剥ぎを行った。人力による掘削と並行して遺物取り上げ等の記録作業を行いながら11月11日までに調査を完了し、エリア2の調査区の埋め戻しを終えた。11月14日には機材・施設を撤収し、現場での作業を完了した。

第4節 室内調査の経過

甲府城下町遺跡での遺物出土量はプラスチック収納箱にして5箱である。現場での作業終了後から室内において図面整理及び出土遺物洗浄、注記を行い、出土品の実測作業を中心とした本格的整理作業を平成24年2月1日から開始し、3月26日までに完了した。並行して遺構・遺物図版の作成、原稿執筆、併せて編集作業を進めた。なお、平成24年度当初に、出土遺物の一部に対して科学分析の必要性が生じたことから、平成24年8月に県立博物館へ分析を依頼した。結果を加えたところで報告書刊行をおこなった。

発掘調査にかかる手続き等

平成23年5月10日付け、教学文第490号にて山梨県教育委員会学術文化財課長から、山梨県埋蔵文化財センター所長へ埋蔵文化財の試掘調査の実施について山梨県県土整備部中北建設事務所から平成23年5月6日付け、中北建第2126号にて依頼があったことを通知。

平成23年5月16日付け、教理文第163-1号にて山梨県埋蔵文化財センター所長による埋文発掘調査の報告を文化財保護法第99条第2項に基づいて山梨県教育委員会教育長へ提出。

平成23年6月10日付け、教埋文163-2号にて山梨県埋蔵文化財センター所長から文化財の発見について文化財保護法第100条第2項により山梨県教育委員会へ甲府警察署への通知を依頼。

平成23年9月8日付け、教学文第1596号にて山梨県教育委員会学術文化財課長から、都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する確認書の締結について発掘調査に関する確認書を山梨県県土整備部都市計画課長と山梨県教育委員会教育長が平成23年9月1日付けて締結したことを通知。

平成23年10月14日付け、教埋文第703号にて山梨県埋蔵文化財センター所長による埋文発掘調査の報告を文化財保護法第99条第2項に基づいて山梨県教育委員会教育長へ提出。

平成23年11月15日付け、教埋文793号にて山梨県埋蔵文化財センター所長から文化財の発見について文化財保護法第100条第2項により山梨県教育委員会へ甲府警察署への通知を依頼。

平成23年11月24日付け、教埋文第810号にて山梨県埋蔵文化財センター所長から山梨県教育委員会へ発掘調査の終了を報告。

調査組織

平成23年度

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 平賀孝雄

次長 八巻與志夫

調査研究課長 高野玄明

調査担当者

調査研究課調査第一担当リーダー 今福利恵、土橋寛仁

作業員

発掘調査 箕本公幸、阪本國廣、原田隆邦 整理作業 渡辺麗子

平成24年度

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 八巻與志夫

次長 福島一雄

調査研究課長 米田明訓

調査担当者

調査研究課調査第一担当リーダー 今福利恵、御山亮済

第2章 遺跡周辺の環境と歴史

第1節 地理的環境

甲府城下町遺跡（古府中環状浅原橋線・以下、調査地点と呼称）は甲府市中央二丁目および四丁目に所在し、甲府市街を南北に走る遊亀通りと東西に走る城東通り（旧甲州街道）の交差点「NTT甲府支店西」の北西及び南西角に位置している。調査地点は甲府市北部を南流する相川が形成する相川扇状地の扇端部に位置する。相川扇状地を形成する相川は、太良峠（標高約1,120m）に水源を持つ仲川が上積翠寺町で西沢川と合流し、その後、下積翠寺町で東沢川と合流してからなる。相川は扇状地西侧を南流し、飯田町で荒川と合流する。また、甲府城下町の北東には、相川扇状地の扇央部東端に沿うように藤川が南流している。藤川は甲府城築城以前、南に向かって直線的に流れおり、流路を甲府城二の堀に流用したという意見もある。現在の藤川は、愛宕山南端の尾根上地形に沿ってクランクして、甲府城北東部をかすめるように東流する。

相川扇状地東側には、甲府北部から南方に伸びる岩窟山支脈の最南端である愛宕山がある。愛宕山の南方には一条小山と呼ばれる丘陵が形成され、中世末にはここに甲府城本丸が築城される。甲府城を中心に、相川扇状地の扇端部から沖積低地にかけての境界部に甲府城下町が形成される。調査地点は甲府城下町南東部に位置し、三の堀に囲まれた町屋に区分される。西に相川、北東に愛宕山を望む場所に立地し、標高約260mである。

第2節 歴史的環境

甲府城築城以前、鎌倉時代初期には甲斐源氏の嫡流で、武田信義の子である一条忠頼が、現在甲府城が建つ一条小山周辺に一条郷や一条氏館を築いて拠点としていた。忠頼が甲斐源氏の勢力拡大を恐れた源頼朝に謀殺されると、夫人は一条氏館に菩提尼寺を建立し、14世紀に一蓮寺と改められる。一蓮寺は甲府城築城に伴い現在の甲府市太田町に移転される。

天正十（1582）年に武田氏が滅亡すると、甲斐は織田信長の支配下に置かれ、織田家臣の河尻肥前守秀隆が配された。しかし、同年6月に信長が本能寺の変で倒れると、甲斐国内で起きた一揆により秀隆は殺害される。その後、甲斐は徳川家康により支配され、天正十八（1590）年まで城代として平岩主計守親吉が甲斐に配される。同年の小田原攻めの後、甲斐は豊臣領となり豊臣秀吉の甥羽柴少将秀勝が配される。翌天正十九（1591）年には加藤光泰が甲斐を封じるが、文禄二（1593）年に光泰が朝鮮出兵中に没すると浅野長政が甲斐に配される。その後、長政は子の幸長とともに慶長五（1600）年の関ヶ原の戦いまで甲斐を統治する。

慶長五（1600）年9月、関ヶ原の戦いにより甲斐は再度家康の支配下に置かれ、翌慶長六（1601）年に城代として再び平岩親吉を配した。甲府城の築城は本能寺の変直後に甲斐に配された親吉の統治時より開始されたと考えられており、羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長らによって築城が進められた。関ヶ原の戦いのあとに再度入国した親吉によって完成されたとされているが、文禄・慶長期の文献が少ないため不明な点も多く、発掘調査においても検証されていない。甲府城は中央に「内城」が置かれ、その外側に「内郭」・「外郭（町人地）」が区画され、それぞれ「一の堀」・「二の堀」・「三の堀」によって取り囲まれた構造をしている。

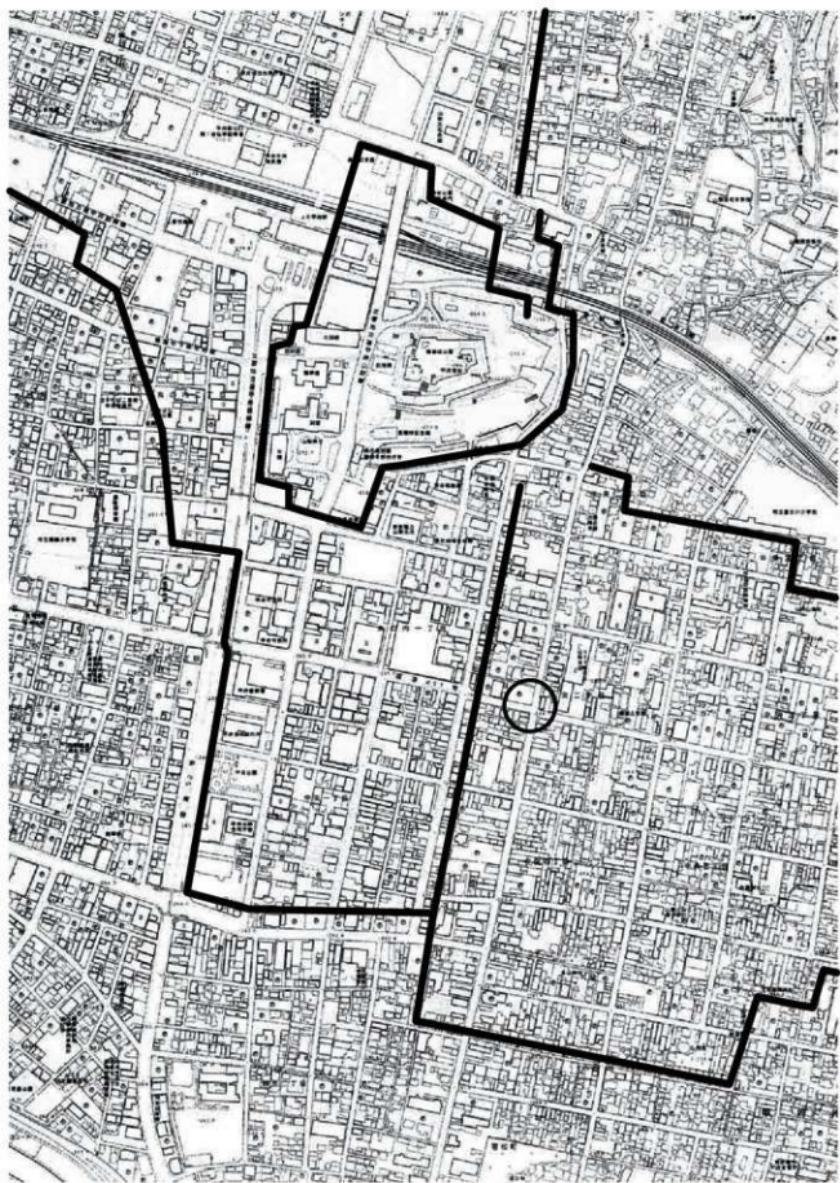
慶長八（1603）年、甲府城は家康の第9子義直の領地となるが、幼年の義直に代わって、親吉が政務を取り仕切っていた。慶長十二（1607）年に義直が尾張清洲城、親吉が尾張犬山城に転封となると甲斐は幕府直轄領となる。このとき甲府城は、武川衆が核となる武川十二騎が城番を務める。元和二（1616）年、2代將軍秀忠の三男秀長が甲府城主となるが、この頃も城番制は続いている。元和四（1618）年には徳川忠長が甲斐を支配し甲府宰相となるが、寛永九（1632）年に改易され、甲斐は再び幕府直轄領となり城番制も再編される。寛文元（1661）年、3代將軍家光の三男綱重が甲府城主に

任せられる。甲斐が幕府直轄領となった寛永九（1632）年から綱重が甲府城主に任命された寛文元（1661）年までの26年間は城番制が続いた。延宝六（1678）年、綱重の子綱豊が遺領を継ぐ。綱豊の甲斐支配は、宝永元（1704）年綱豊が綱吉の養子となり江戸城西の丸に配されるまで続いた。同年、綱吉の側近であった柳沢吉保が甲府城主となり、甲府城の大改修や城下町の再整備などの事業に取り組んだ。宝永六（1709）年、綱吉が死ぬと吉保は駒込の六義園にて隠居し、子の吉里が襲封する。翌宝永七（1710）年には、吉里が甲府城の在城主となった。享保九（1724）年、8代將軍吉宗による享保の改革に伴い吉里は大和郡山に転封され、甲斐は再度幕府直轄領となる。この後、明治維新まで甲斐は幕府直轄領として甲府勤番による統治がなされる。

ところで、中世末から江戸時代にかけての甲斐の経済を支えた制度の一つに「甲州金」がある。「甲州金」は、武田信玄が力を入れた鉱山開発により創設されたもので、「大小切」・「甲州桥」と並んで「甲州三法」と呼ばれた。甲州三法は「国法」として、江戸時代にまで持ち越されて適用される。武田氏支配時の甲州金は「碁石金」と呼ばれ、金を碁石状に成形した極印のない金貨である。近世の貨幣制度が整う前のもので、秤量貨幣として取り引きされた。江戸時代に入っても、「甲判」や「こいし古判」といった計数金貨のほかに、「すな金」と呼ばれる秤量金貨が近世初頭まで流通していた。当時、甲州金を取り扱った業者として、「金屋」や「判座」があるが、のちに「甲州金座」と呼ばれる判屋に、山下・志村・野中・松木の四氏があり、伝世品に押された極印にその銘がみられる。これら四氏の金座において、甲州金貨幣の鋳造がなされた。

慶長五（1600）年、甲斐が家康領になると甲州金の製造が停止される。その後、慶長十三（1608）年に、金座頭人の後藤庄三郎光次により、碁石金が真似されやすいことを理由に江戸小判のようにのし金にして見せるように命じている。翌慶長十四（1609）年には、松木五郎兵衛が「したかねはいふき（下金灰吹）」と呼ばれる金精錬の独占権を、同年9月には甲州金の極印権を特許され、松木氏が甲州金座を独占する。

調査地点は甲府城下町三の堀に囲まれた町人地に該当し、甲府城の南東に所在する。「甲府町年寄山本家由緒書」（文化十年）によれば、松木次郎三郎正利は天文年間に武田信玄・勝頼の御朱印を給わり、三男の七左衛門と四男の五郎兵衛を引き連れて柳町へ転居したとされる。調査地点は旧柳町に位置しており、松木金座が所在していたとされる場所に隣接している。



第1図 調査位置図

第3章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

調査区域は、排土を場外搬出することができなかつたため事業用地内において排土場所を確保しなければならなかつた。発掘調査区は、城東通り北側のエリア1では約60m²、南側のエリア2では約30m²で、それぞれの中で排土処理する必要があつた。このため、発掘調査は、エリア1、2ともにそれぞれ調査区域を半分ずつに区切つて切り返して行つた。このためエリア1は北側と南側に分け、エリア2では東側と西側に分けて順次調査を進めた。掘削範囲は、市街地であり交通量の多い国道・県道に沿つて深さ1.5~2.0m程の掘削とこれにあわせて湧水も予想されていたことから、崩落を防ぐため用地境界から2.0m離れたところとした。調査区内には世界測地系座標に基づく5m四方のグリッドを設定すべきだが、狭小地であることから調査区域外に基準杭を4箇所設置し、この世界測地形座標から整理過程で図上にてグリッド設置した。ただしグリッド名は付していない。

表土剥ぎは、エリア1の北側から着手し、重機によって試掘調査の結果をふまえて地表下約50cmにみられる江戸時代の包含層直上(II層直下)まで行った。以下、人力による遺構確認を行い、あわせて掘り下げながら各遺構については、平面図、断面図を作成し、出土遺物の位置を記録した。先行して試掘坑を掘り下げ、土層堆積を確認しながら各生活面を確認した。III層を掘り下げたところでIV層の地盤造成層上面となる生活面で止めた。記録・写真撮影後、IV層を掘り下げ、VIII層上面の生活面を確認したところで止め、遺構精査、記録を行つた。再度VIII層を掘り下げ、わずかに古墳時代遺物を検出したところで湧水がみられた。試掘坑や攪乱箇所によりさらに下層部を確認したが、遺構・遺物はみられずVIII層を掘り下げたところで調査を終了した。各生活面における遺物包含層からの出土遺物は遺構に伴うものを除いて出土層位を確認したところで一括にて取り上げた。調査の進捗状況にあわせて発見された遺構や遺物については小型一眼レフカメラとデジタルカメラにて撮影を行つた。調査終了後には埋め戻しを行い、エリア1の南側、エリア2の東側、西側と順次調査を進めていった。

第2節 基本層序

試掘結果から少なくとも2枚の江戸時代生活面があることがわかつてゐた。試掘坑掘削による土層を先行して確認しながら調査を進めていった。

I層 表土。現代のものであり、碎石が敷き詰められている。エリア1では碎石下に厚さ5cm程のコンクリート面がある。

II層 暗褐色粘質土。コンクリート下面にあり、5~10cmの礫、レンガさらに焼土、炭化材を多く含む。下面には炭が層状となるところがある。近代。

III層 褐色粘質土。II層よりは明るい。5~20cmの礫、焼土、炭化材を多く含む。江戸4期。エリア1南とエリア2では間層をはさんで上下に焼土、炭層がみられる。III上層は炭・焼土層、III中層は暗灰色粘質土で炭・焼土を多く含む。III下層は炭・焼土層。

IV層 黄褐色粘質土。花崗岩質円礫5~10cm多く含む。山土であり、造成地盤層。江戸3期。IV層として、IVとV層の混在した層が部分的にみられる。エリア1では30cm程と厚いが、エリア2では10cm程と薄かった。

V層 暗灰色粘質土。陶磁器等含む。エリア1北側にみられる。江戸2期。エリア2ではみられない。

VI層 青灰色シルト。エリア2ではみられない。

VII層 暗灰褐色粘質土。焼土、炭化材を多く含む。江戸1期。

VIII層 灰褐色粘質土。古墳時代。VIII'層はエリア2にて褐色粘質土に部分的な明黄褐色土ブロックがはいる。VIII''層はエリア2にて、暗灰色粘質土である。この土層上面にて湧水がみられる。近代の建物基礎杭は、松3本単位でこの上面まで打ち込まれていた。

第3節 発見された遺構

(1) 古墳時代

明確な遺構はみられなかつたが、エリア2のVIII層中から杭が7箇所みつかった。いずれも先端が尖るよう削り出されている。VIII層中から土器片がわずかに出土した。

(2) 江戸時代

a 江戸1期

VIII層上を地盤面として形成された文化層で、IV層の造成層の下層となる。石臼が埋設されており、あわせて礎石列が検出されたことから土間建物があったものと思われる。

・石臼炉 VIII層を地表面として石臼上面ができるように埋設されていた。石臼上面中央部には凹みがあり、この中からフイゴ羽口片が出土した。凹みの上端部には溶融物が付着している。石臼上面には一箇所の凹みがあり、ここが東側となる。石臼の掘り込みは擂鉢状で底面がそのまま掘り込み面となる。立ち上がりは、石臼側面の下端部から斜めに焼土化している。焼土は石臼の南側に特に厚くひろがっていた。また、石臼から西側には大量の粗粒が厚さ約5cmで広がっており、木炭が混在していた。石臼を埋設して木炭をフイゴによって加熱する炉と思われる。

・礎石4 調査区の西側からみつかった大型礎石で、近世の礎石1～3に類似する。東西75cm、南北60cm、厚さ20～25cm。江戸1期を覆う造成層（IV層）下から出土していることから、江戸期のものである。西側から礎石4、礎石9、礎石8、礎石7の順で東西方向に1間（約180cm）間隔で並ぶが、約40cm高い位置になる。上面は扁平で丸みを帯びた方形に近い形の自然石である。礎石下層には径10～20cm程の礫が敷き詰められていた。

・礎石7 調査区東側の試掘坑底から検出し、礎石8、9、4と東西方向に並び、礎石8、9とは上面がほぼ同じ高さとなる。南北45cm、東西45cmの丸みを帯びた三角形を呈した自然石である。礎石まわりに小礫がまとまっていたが、下にはみられない。

・礎石8 上面が平坦で、丸みを帯びた方形を呈する南北40cm、東西35cmの自然石である。礎石7、9と高さがほぼ同じに並んでいる。周囲には小礫が多くみられ、礎石はやや沈んだ感じであった。礎石下には礫が無く、加圧のためか割れていた。

・礎石9 平坦面を上面にした不整形を呈する南北35cm、東西40cmの自然石である。礎石8、7と同じ高さで並ぶが、西側に隣接する礎石4よりは約40cm低く、段差がみられる。礎石西側に小礫がまとまっている。礎石下には礫がみられない。

・石列1 級石4の南側に並ぶもので、礎石4、9、8、7列に直行する。礎石4から1間の間に4石並ぶ。礎石列と同じ建物に伴うものと思われる。

・石列2 級石8と級石9の南側半間（約90cm）に併行するよう5石がまとまってみられた。上面はほぼ同じ高さである。礎石列と同じ建物に伴うものと思われる。

・石列3 級石7と8の間の北側に南北に2石が1間で並ぶ。上面はいずれも平坦であり礎石と思われる。礎石7、8とは位置的にずれており、別のものと思われる。

b 江戸2期

江戸1期は青灰色砂層に覆われており、この上面にV層としてエリア1区北側のみに生活層がみられた。遺物は出土するが、遺構を形成するほどではない。

c 江戸3期

IV層とした造成地盤内に陶磁器類を中心とした遺物が出土した。

d 江戸4期

IV層の造成地盤層上に形成された文化層で、土坑や礎石などが検出された。

・**土坑** 東西方方向に主軸を持ち、東西205cm、南北65cm、深さ30~40cmを測る。底面は平坦である。覆土上層に礎石様の平坦な石があり、これを取り囲むように10~20cmの礎が散在する。出土遺物もみられず性格は不明である。

・**配石** 土坑の南側にまとまった礎、礎石がみられ、この下層に柱穴様の痕跡がみられた。礎石5の北側に隣接して一辺20cmの角柱が据えられていたかのような四角い凹みが3箇所みられた。これらの角柱様穴痕の軸は斜めで、同時にあった柱痕ではないが、高さはほぼ一様であり、また深さも5~10cm程度と浅いため、土間に設置された柱痕と思われる。さらに円形を呈する掘り込みがみられ、あわせて間知石状の30cm程の石が二つあり、いずれも3.5cm×1.5cmの矢穴がみられた。性格は不明。

・**礎石5** 不整形形を呈する南北35cm、東西30cmの自然石で、上面は平坦。底面は不整形で、栗石などは下に敷き詰められていなかった。

・**礎石6** 不整形形を呈する南北30cm、東西30cmの自然石で、上面は平坦。底面はやや尖った不整形で、栗石などはみられなかった。

・**杭** 調査区内から4箇所の杭がみられた。IV層から打ち込まれ、VIII層にまで達する。径7cm程度で先端は尖るように削り出されている。上端部は腐食している。

エリア2では攪乱が著しかったが、部分的に江戸4期の遺構がみられた。

・**礎石及び礎溝** 南北方向に東西80cm、南北45cmの不整形大型礎石とともに拳大礎が充填された溝がみられた。ここから東側は江戸時代文化層がのこっているが、西側は深く攪乱されている。礎の幅は75cm、深さ50cmでIII層上面から掘り込まれている。礎石は上面下面とも平坦でかなりの重量であったが、礎石下には栗石などはみられなかった。土蔵の基礎部分と思われる。西側攪乱は深く、コンクリートブロック、ガレキなどが埋設されていたことから甲府空襲後によるものと思われ、土蔵基礎東側は攪乱がないことからこのころまで土蔵が存在していたものと推察される。

・**木製品集中** 調査区西端にて検出した。遺存状況は悪いがムシロが敷かれた状況で木材がまとまっていた。焼けた木材もあり廃棄されたものと思われる。

(3) 近代

近代IV層上面にみられ、大型の礎石と上水を検出した。礎石には柱があたる部分にコンクリートが付着し、また上水は土層断面から近代のものと判断した。

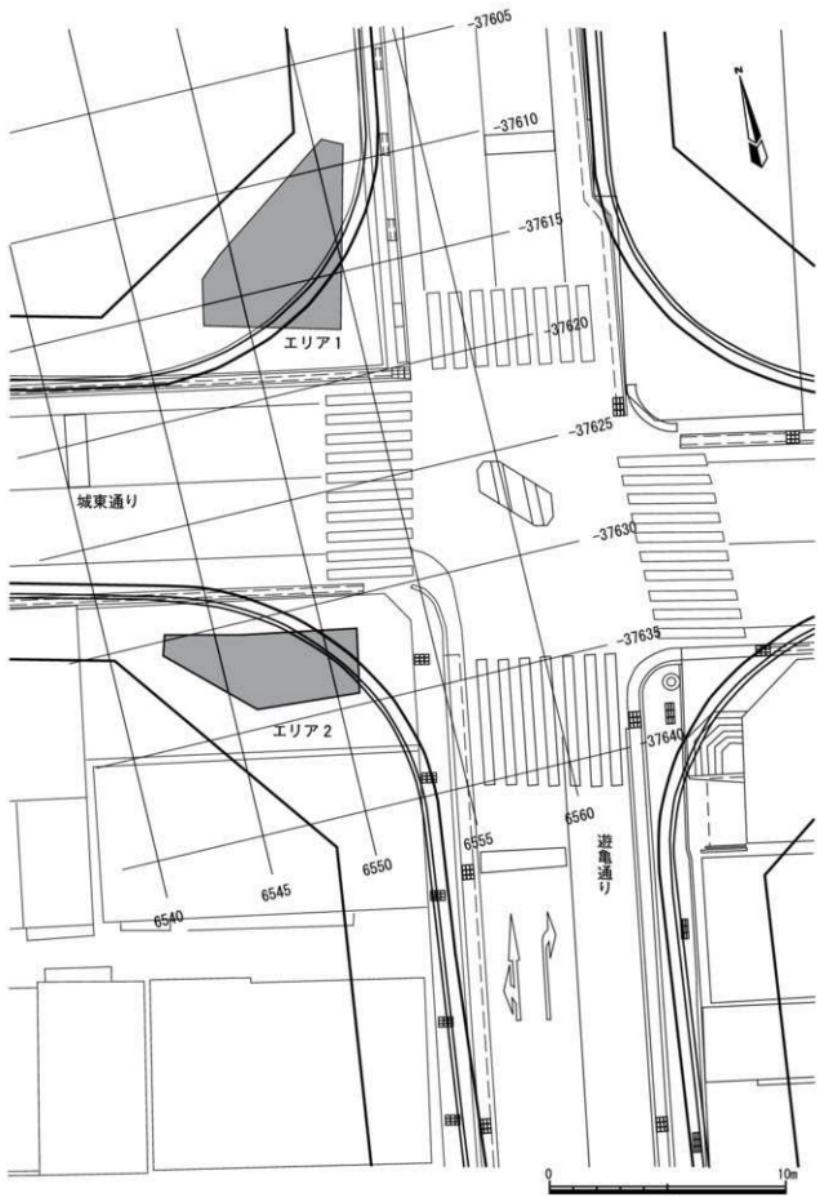
・**礎石1** 一端が欠けるが、南北60cm、東西45cmの長方形を呈し、厚さは10~20cm程度で不均一である。上面は平坦で、柱面には一辺30cmの方形のコンクリートが付着している。周囲には栗石が3個みられた。礎石下部には20~30cm程度の厚い栗石が敷き詰められていた。さらにこの下にも一回り大きな30~45cm程度の平坦な石が並べられ、2層構造であった。

・**礎石2** 南北65cm、東西45cmの長方形を呈し、厚さは15cm程度である。上面及び下面は平坦である。周囲には10cm程度の栗石が取り巻くように並べられていた。この一つにコンクリートの付着がみられた。礎石下部には、20~30cm程度の厚い栗石が敷き詰められていた。礎石1と2は約150cm離れており、また礎石上面の高さも15cm程度の差がみられる。

・**礎石3** 東西80cm、南北60cmの不整形形を呈し、厚さは15cm程度である。上面は平坦で、柱面には一辺26cmの方形のコンクリートが付着している。周囲には10~20cmの礎が囲むようにみられ、また下部からも礎石の形に合わせて30~50cm程度の礎が敷き詰められていた。

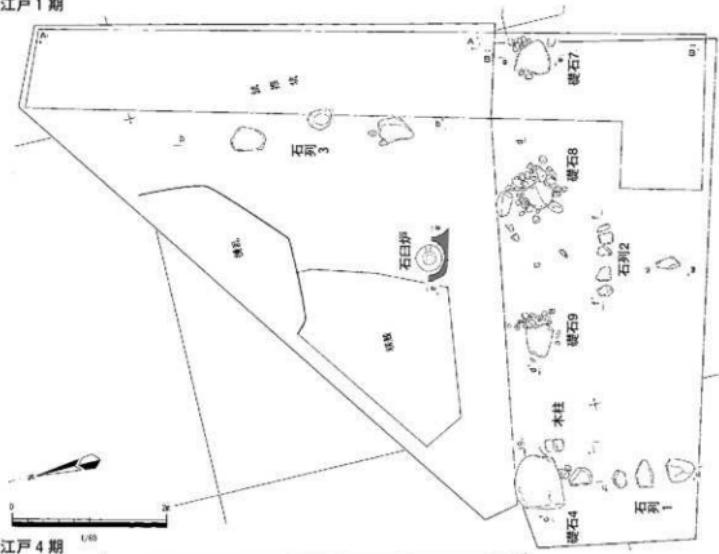
・**上水1** 純石3のすぐ南側に東西方向に検出した。断面からみると近代層から掘り込まれている。径8cm程度の竹管が使われているが、土圧でつぶれている。竹管下には銅線が置かれていた。

・**上水2** 上水1のすぐ南側に東西方向に検出した。断面から上水1と同じ時期のものであるが、上水1よりも残りが悪い。竹管が使われているが、土圧でつぶれている。すぐ東西端で攪乱を受けている。

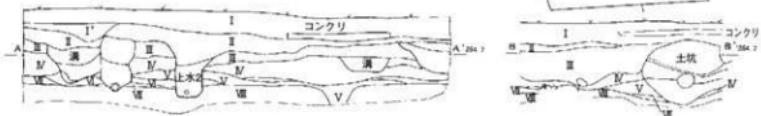
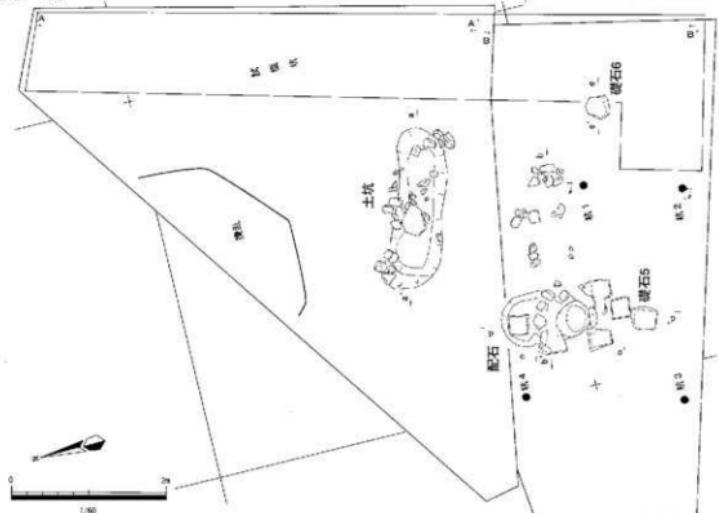


第2図 調査区域図

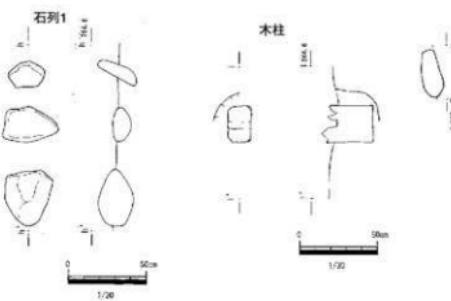
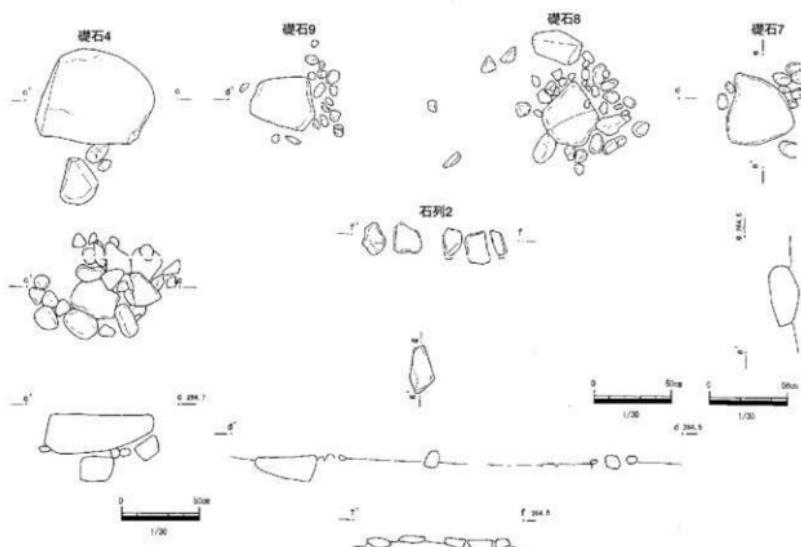
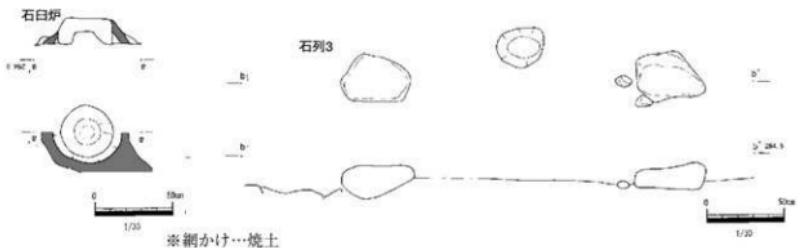
江戸 1期



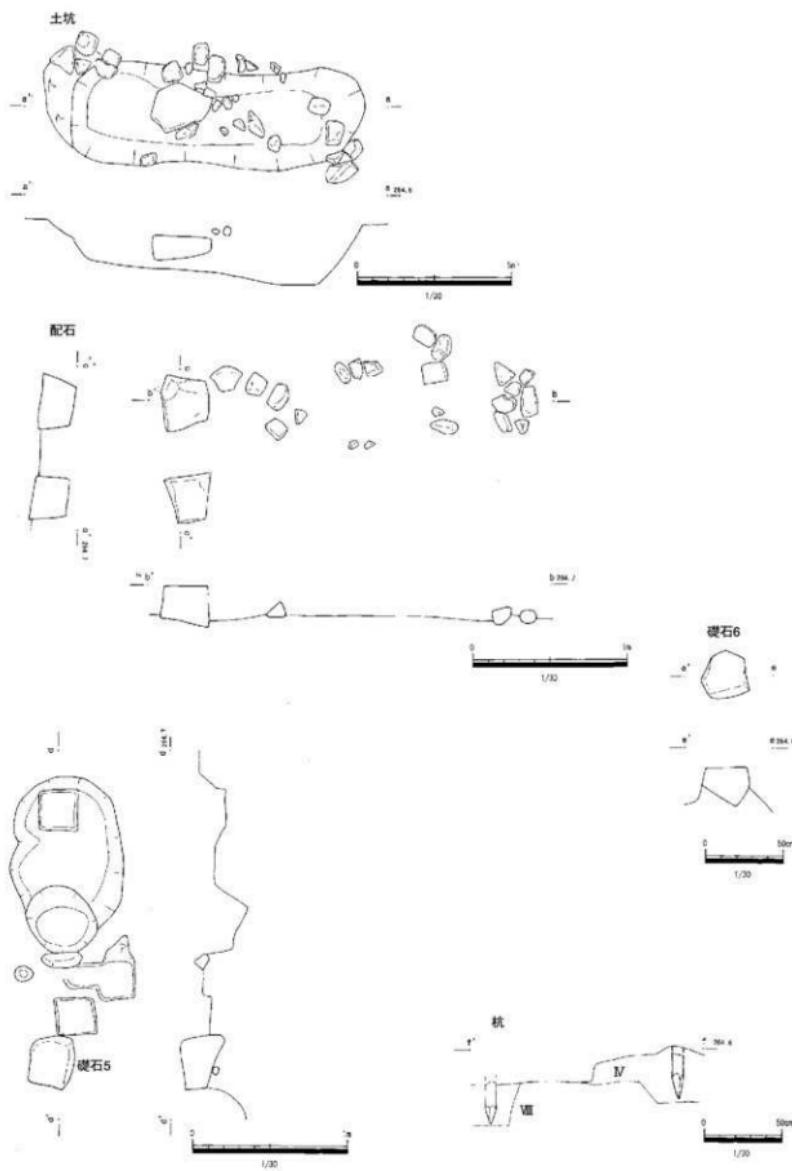
江戸 4期



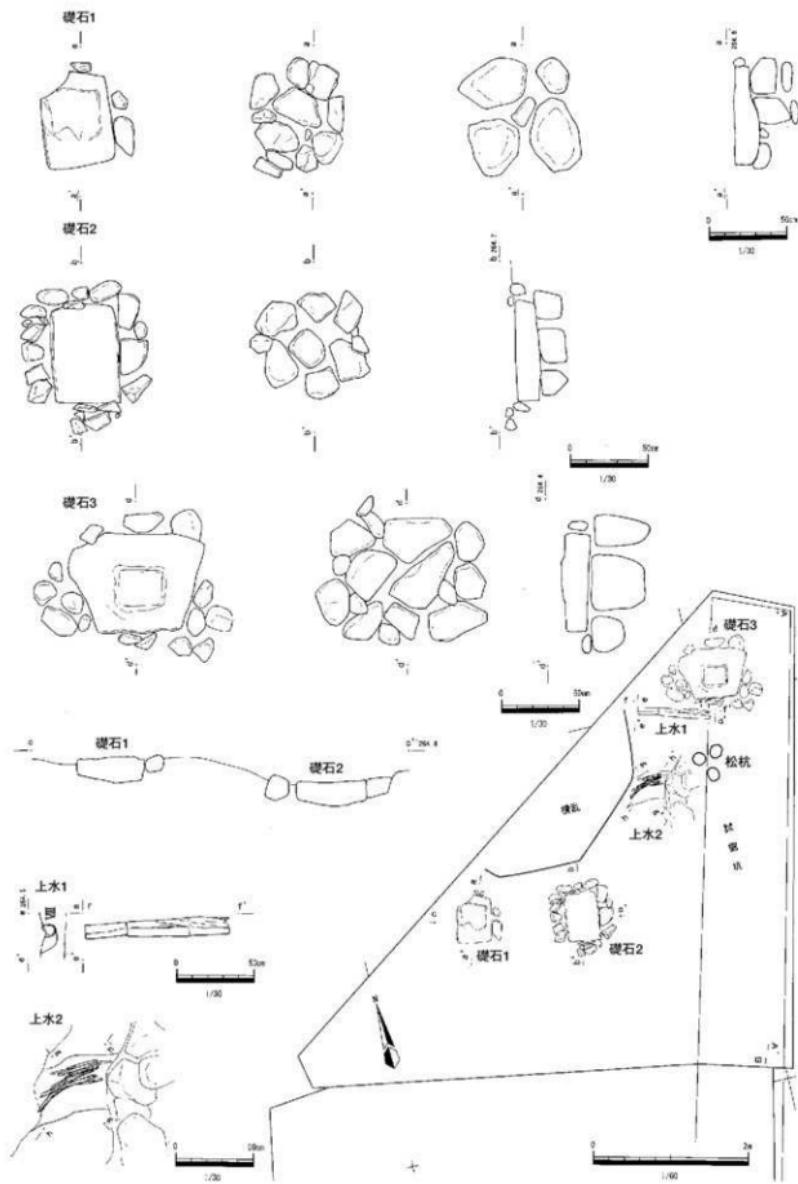
第3図 エリア1 江戸期全体図



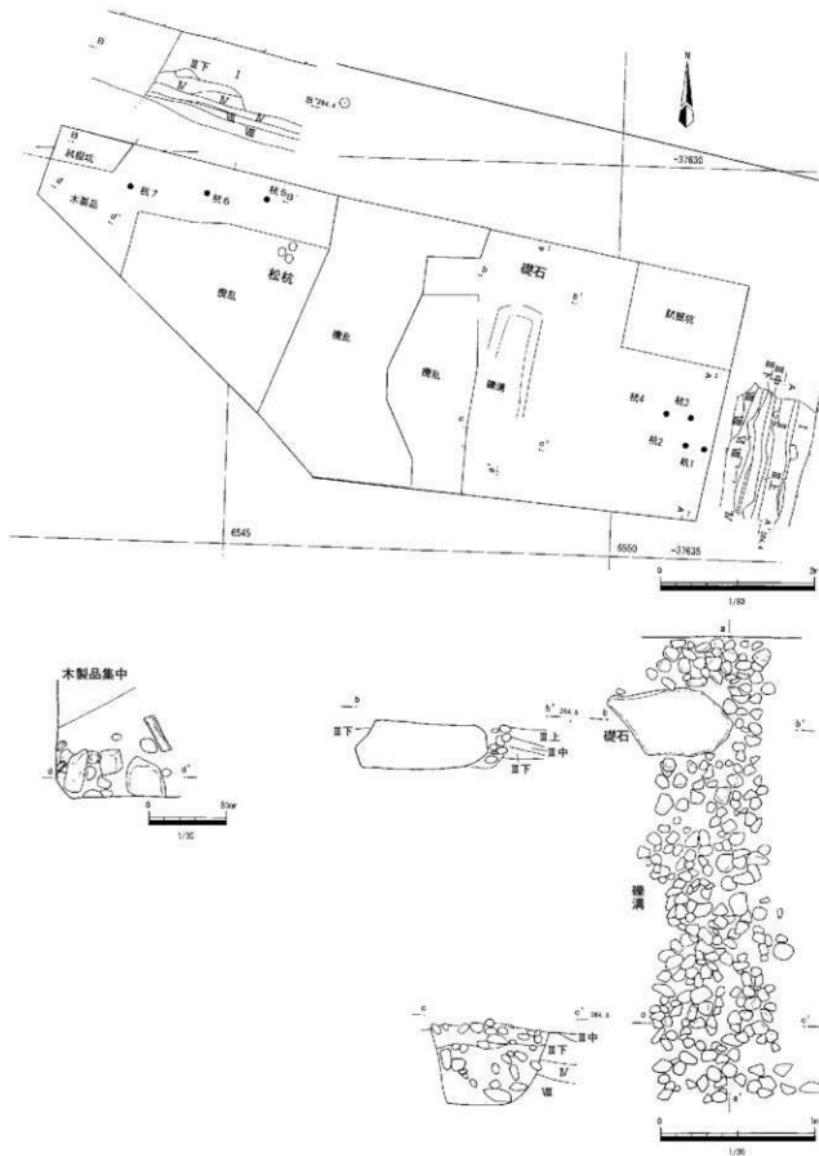
第4図 エリア1 江戸1期遺構図



第5図 エリア1 江戸4期遺構図



第6図 エリア1 近代全体図



第7図 エリア2 全体図

第4節 発見された遺物

(1) 陶磁器類

エリア1 (第8図～第10図)

【エリア1 第Ⅲ層】磁器…染付碗（1・2・3・4・6）、小杯（5）、染付皿（7・8・9）、青磁小壺（10）、青磁片（11）、白磁小碗（12）、白磁短頸壺（13）・陶器…志野陶器片（14）、志野皿（15）、肥前鉢（16）、肥前壺？（17）、黄瀬戸碗（18）、織部鉢？（19・21）、織部大皿（20・22）、瓶徳利（23）、天目碗（24・25）、陶器碗（26）、陶器皿（27）、擂鉢（28）・土師器…焙烙（29）、カワラケ（30）・瓦…丸瓦（31）が出土した。1は18世紀末、6は18世紀代、4・8は19世紀代の所産である。2は外国製と思われる。21は脚部が約120°の角度で屈曲しているため六角鉢の可能性が高い。30は内面と口縁部の一部に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。江戸4期に帰属する。

【エリア1 第Ⅳ層】磁器…磁器片（32）・陶器…瀬戸碗（33）、天目碗（34・35）、志野碗（36～43）、志野皿（44）、織部鉢？（45）、肥前碗（46）、碗口縁部片（47～50）、皿口縁部片（51・52）、鉢口縁部片（53）、擂鉢（54）、陶器底部片（55～57）、碗？口縁部片（58～61）・土師器…カワラケ（62～64）が出土した。33・34は比較的古い時代に帰属するもの可能性がある。46は陶胎染付である。64は16世紀のカワラケである。江戸3期に帰属する。

【エリア1 第Ⅳ～Ⅶ層】第Ⅳ・V・Ⅵ層から出土した破片が接合した。・陶器…陶器碗（65）と第Ⅳ・Ⅶ層から出土した破片が接合した。・磁器…青磁碗（66）が出土した。江戸1～3期のいずれかの時期に帰属するものであろう。

【エリア1 第Ⅴ層】磁器…肥前碗（67）・陶器…天目碗（68）が出土した。67は比較的古い時期の肥前である。江戸2期に帰属する。

【エリア1 第Ⅵ層】陶器…志野碗（69）が出土した。第Ⅵ層はエリア2では確認されていないが、江戸1期～2期の間に帰属する。

【エリア1 第Ⅶ層】磁器…磁器皿？（70）・陶器…天目碗（71）、志野碗（72・73）、陶器片（74）、肥前碗（75）、陶器鉢（76）・土師器…カワラケ（77～86）・土製品…フイゴ羽口（87）が出土した。75は呉器手碗で17世紀後半の所産である。77・79・80・82～86の内面には金粒の付着が認められる。Ⅶ層は江戸1期に帰属する層である。炉として使用された石臼の存在より、この金粒が付着したカワラケは金の精錬に関連する遺物と考えられる。87はフイゴ羽口である。先端部は溶融しており、そこに金粒の付着が認められる。このフイゴ羽口は第Ⅷ層出土の石臼（160）のくぼみ内から出土しており、金の精錬に使用されたものと考えられる。

【エリア1 第Ⅷ層】須恵器…須恵器片（88・89）が出土している。第Ⅷ層は古墳時代の遺構面であるが、遺物は少ない。

エリア2 (第11図～第13図)

【エリア2 第Ⅱ層】磁器…磁器碗（1）・陶器…織部鉢（2）、志野皿（3）・土製品…漆喰塗（4）が出土した。1は見込み部に「永□（末カ）年制」と書かれ、底部裏には銘のようなものが書かれている。4の漆喰塗の内部には釘が2本打ち込まれており、釘は角釘が使用されている。近代に帰属する。

【エリア2 第Ⅲ上層】磁器…碗口縁部片（5）、碗底部片（6・7）、徳利口縁部片（8）、瓶頸部（9）・陶器…志野碗（10）、碗口縁部片（11・12）、瓶頸部（13）、皿底部（14）・土師器…七厘？（15）、鉢（16）、壺口縁部片（17）が出土した。15は鉢状の土器の体部に方形の透かしが開けられたもので、器面に煤が付着しているため、ここでは七厘とした。16は分厚く作り出され、外間に10条単位の櫛目が刻まれている。

【エリア2 第Ⅲ上層焼土】陶器…碗底部片（18）、壺？頸部（19）・土師器…カワラケ（20～23）、焙烙（24）、土師器片（25）が出土した。20・22・23の底部に回転糸切り痕がみられる。

【エリア2第Ⅲ下層】磁器…白磁碗(26・27)・陶器…鉢?口縁部片(28)、志野碗(29)、碗底部片(30)、瓶?(31)、鉢(32~34)・土師器…カワラケ(35・36)、土師器片(37・40)、焙烙(38)、焙烙把手片(39)が出土した。36は口縁部に煤の付着が見られる。灯明皿として使用された可能性がある。第Ⅲ層は江戸4期に相当する。

【エリア2第Ⅳ層】磁器…磁器片(41)・陶器…陶器碗片(42)が出土。江戸3期に帰属する。

【エリア2第Ⅶ層】土師器…土師器口縁部片(43・45)、カワラケ(44)、土師器体部片(46)が出土した。46の内面には指頭圧痕が見られる。古墳時代に帰属するものである。

【エリア2集中】磁器…磁器底部片(47)、磁器皿(48)が出土した。

【エリア2溝1層】甲府空襲後の遺構と思われる溝1層からは、陶器…陶器碗(49)、陶器皿(50~52)が出土した。

【エリア2溝2層】陶器…碗?底部片(53)が出土した。

【攪乱】磁器…磁器小杯(54)、磁器小皿(55)、磁器皿(56)・陶器…陶器碗(57・58)、陶器皿(59)、陶器鉢(60)、陶器蓋(61)、陶器注口(62)・土師器…カワラケ(63~66)、焙烙(67・68)、有孔土師器(69)、突起状土師器(70)が出土した。61は秉燭の蓋と思われる。63は内面と口縁部の一部に煤が付着しており、灯明皿としての用途が推測される。69は体部に円形の孔があげられたものであるが、器種は不明。70は端部が肥厚して先端が尖った形状をした土師器である。何かの突出部であろうか。

(2) 石製品(第13図)

【エリア1第Ⅶ層】江戸1期に帰属する。炉として使用された石臼(1)が出土した。第Ⅶ層を地表面にして、石臼の上部が地表に面した状態で埋設されていた。中央のくぼみの縁辺は溶融している。くぼみの内部からフイゴ羽口(87)が出土しており、金精錬に使用されたものと思われる。

【エリア2第Ⅲ下層】江戸4期に相当する。碁石状石製品(2)が1点のみ出土した。

(3) 金属製品(第13図)

【エリア1第Ⅶ層】鉄釘(1・2)と用途不明の金属製品(3)が出土した。1は角釘であるが、2は不明。3は円筒状の金属製品で、1枚の板を丸めて作られたと思われる。

【エリア2第Ⅰ層】鉄釘(4)が出土した。断面が四角形の角釘である。

【エリア2第Ⅱ層】鉄釘(5・6)とキセル(7)が出土した。5は角釘であるが6は不明である。7は先端が折損している。

【エリア2第Ⅲ層】上層からは鉄釘(8・9)、下層からは鉄釘(10)・キセル(11)・風鐸(12)・用途不明金属製品(13)が出土した。8~10は角釘である。13は立方体の上端につまみが付いた形状をしており、分銅のような用途が考えられようか。

【整地層】キセル(14)が、先端がつぶれた状態で出土した。

【第1土坑】用途不明の金属製品(15)が出土した。半球形で頂点が欠損している。

【エリア2攪乱】用途不明金属製品(16・17)が出土した。16は円形の板から断面長方形の柄?が屈曲して伸びている。17は板状の金属製品である。板の中央上方には円孔がある。

(4) 銭貨(第13図)

【試掘第5トレーナ】1は寛永通寶。Ⅶ層から出土した。江戸1期に帰属する。その他、寛永通寶が2点出土している。

【エリア1第Ⅲ層】2は明錢の永樂通寶(初鋤年1408年)、3は日本銭の乾元重寶。江戸4期に帰属する。その他、銭種不明の銭貨が3点出土している。

【エリア1第Ⅳ層】4は皇宋通寶である。江戸3期に帰属する。

【エリア1第Ⅶ層】5は寛永通寶である。江戸1期に帰属する。その他、寛永通寶が1点出土している。

【エリア1木柱】6は天聖元寶、その他、寛永通寶が1点出土している。

【エリア2第Ⅱ層】7は寛永通寶である。近代に帰属する。

【エリア2第Ⅲ層】第Ⅲ層から寛永通寶1点、中層から寛永通寶1点、下層から寛永通寶1点、焼土から寛永通寶1点・聖宋元寶（8）が出土した。江戸4期に帰属する。

【エリア2第Ⅳ層】皇宋通寶と元豐通寶（9）が出土した。江戸3期に帰属する。

【エリア2礎石下】エリア2礎石下からは寛永通寶（10）が出土した。

(5) 木製品・木質遺物（第14図）

【エリア1第V層土坑】棒状木製品（1）が出土した。用途不明である。

【エリア1第Ⅷ層】加工木片（2）、棒状木片（3）、板状木片（4）、杭（5）が出土した。

【エリア1IV・V・VI層】板状木片（6）が出土した。

【エリア1杭】エリア1では杭が2本（7・8）が出土した。いずれも芯持ち丸太材である。

【エリア2第Ⅸ層】杭（9・10・12）と板状木片（11）が出土した。9は芯持ち丸太材、10は半截丸太材、12は追い柾目材である。

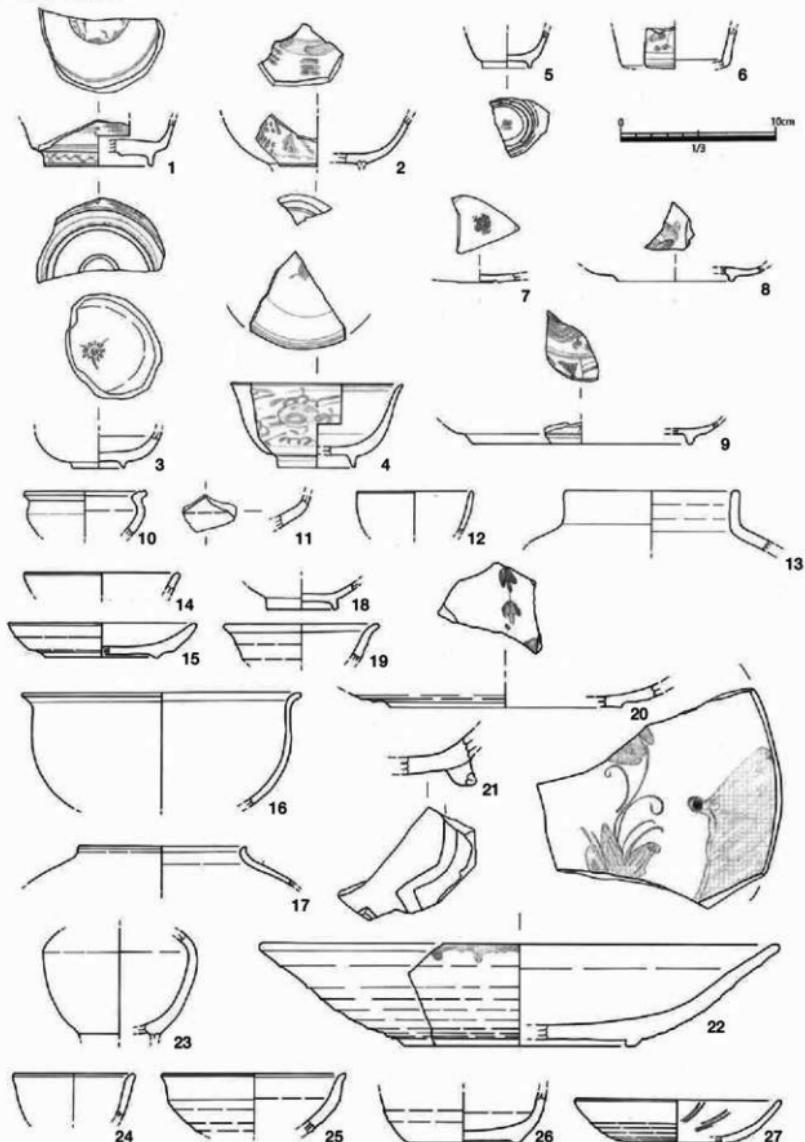
【エリア2杭】杭（13～16）が出土した。13～15は芯持ち丸太材、16は板目材である。

【エリア2礎溝底】木炭（17・18）と重箱片（19）が出土した。19は朱漆地で黒漆により唐草文が描かれている。

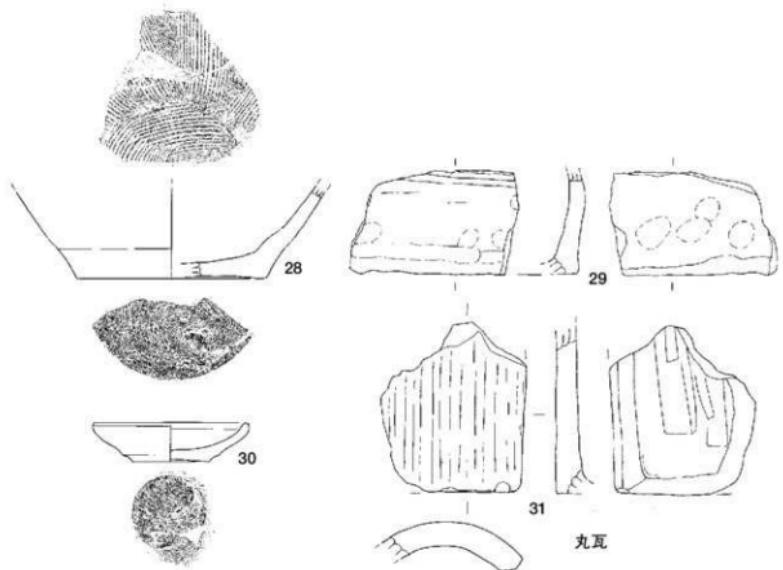
【エリア2】このほかエリア2では、棒状木片（20）、加工木片（21）、木柱（22）が出土している。

20は芯持ち丸太材、21は芯持ち削り出しである。22は表面に手斧痕が残る。また、上半部は腐朽欠損しているが、幅3.5cm×高さ5.5cm以上のホゾ穴がみられる。

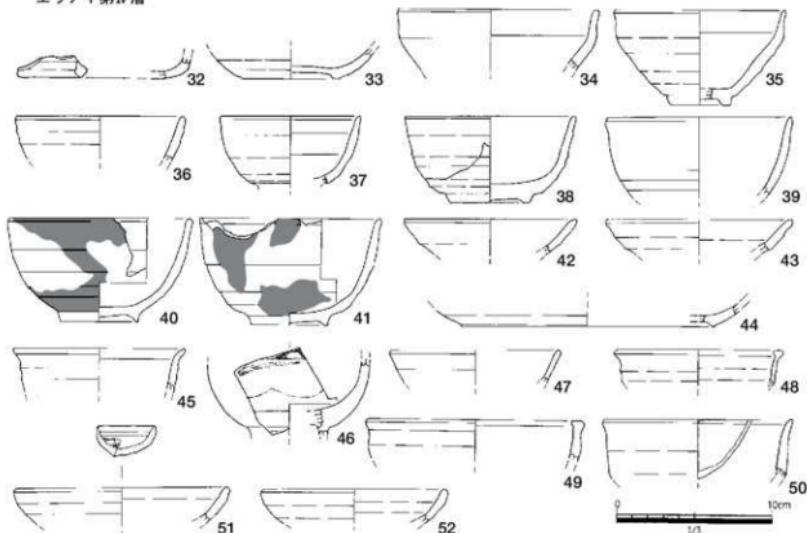
エリア1第Ⅲ層



第8図 出土遺物 陶磁器類 (1)



エリア1 第Ⅳ層

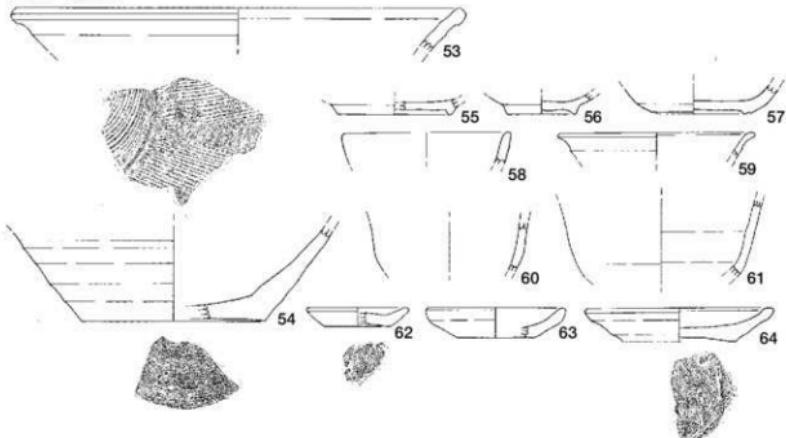


※網かけ

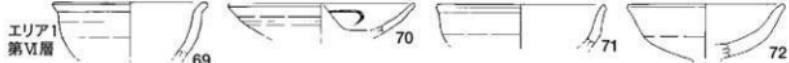
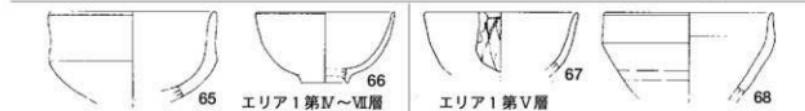
40・41…被熱範囲

第9図 出土遺物 陶磁器類 (2)

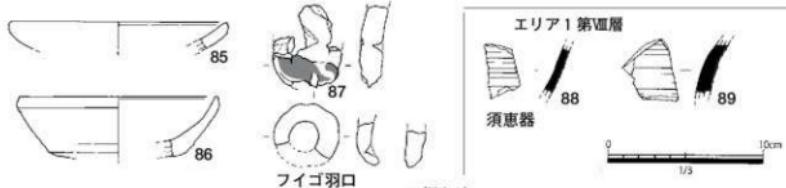
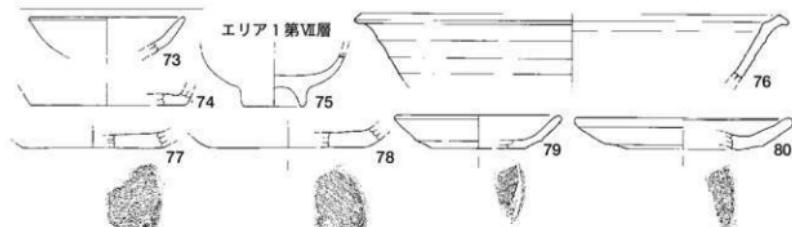
エリア1 第IV層



エリア1 第IV～VII層



エリア1 第V層



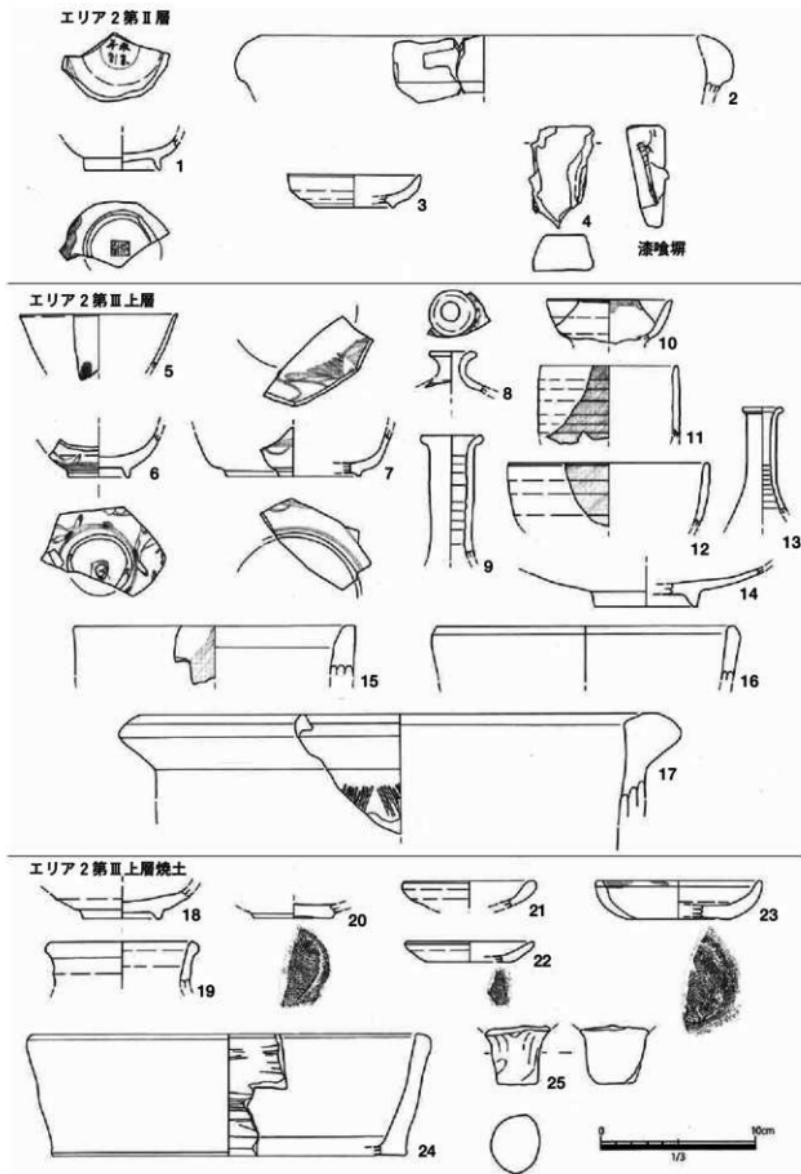
エリア1 第V層

須恵器
※網かけ

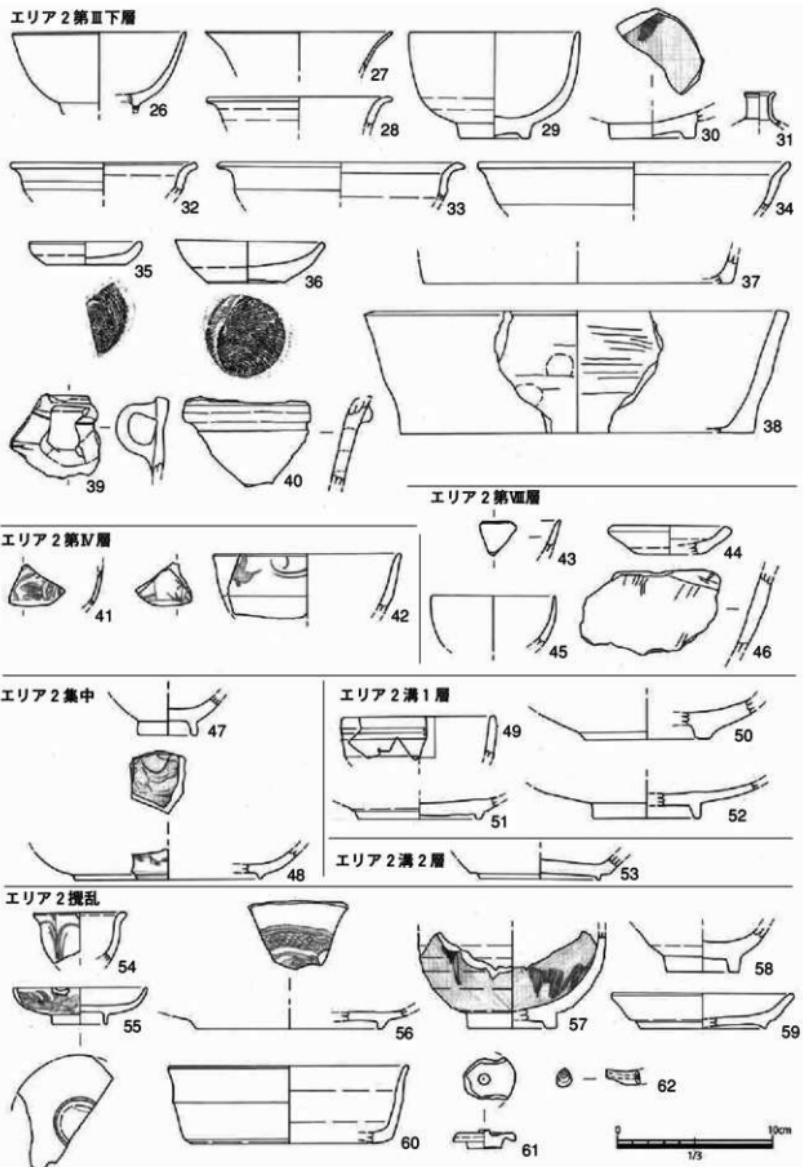
87～金粒付着部



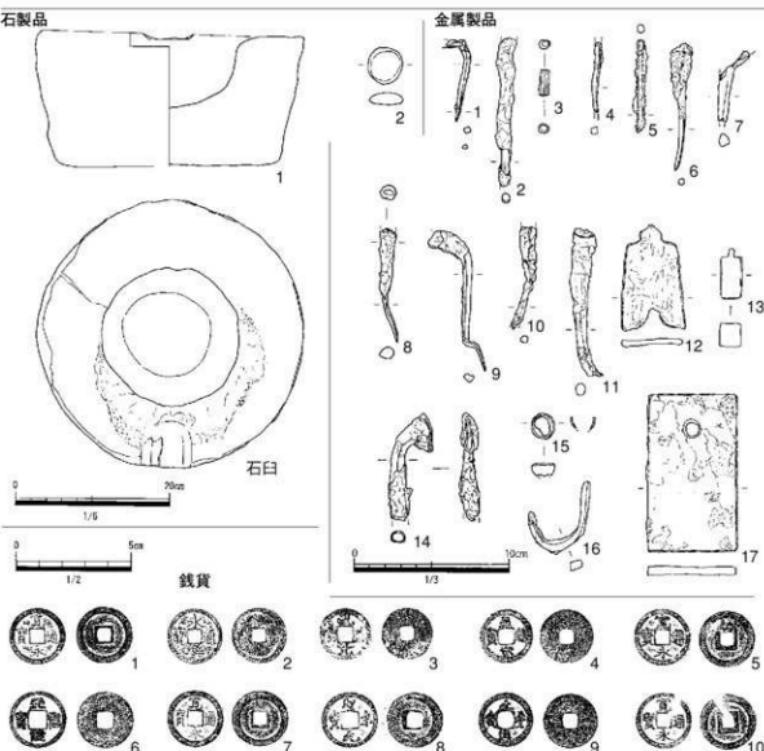
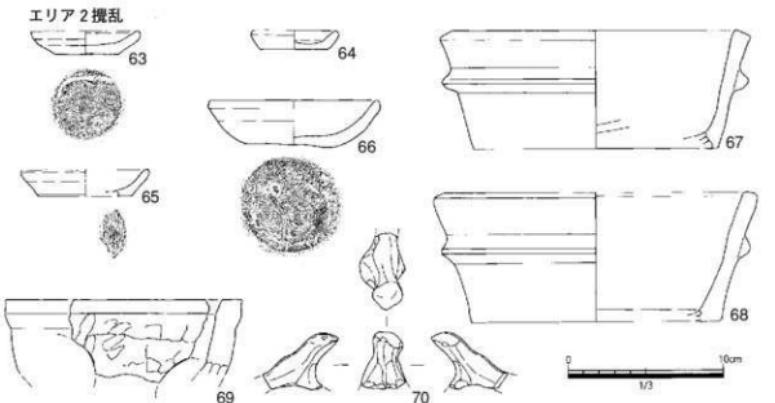
第10図 出土遺物 陶磁器類(3)



第11図 出土遺物 陶磁器類 (4)

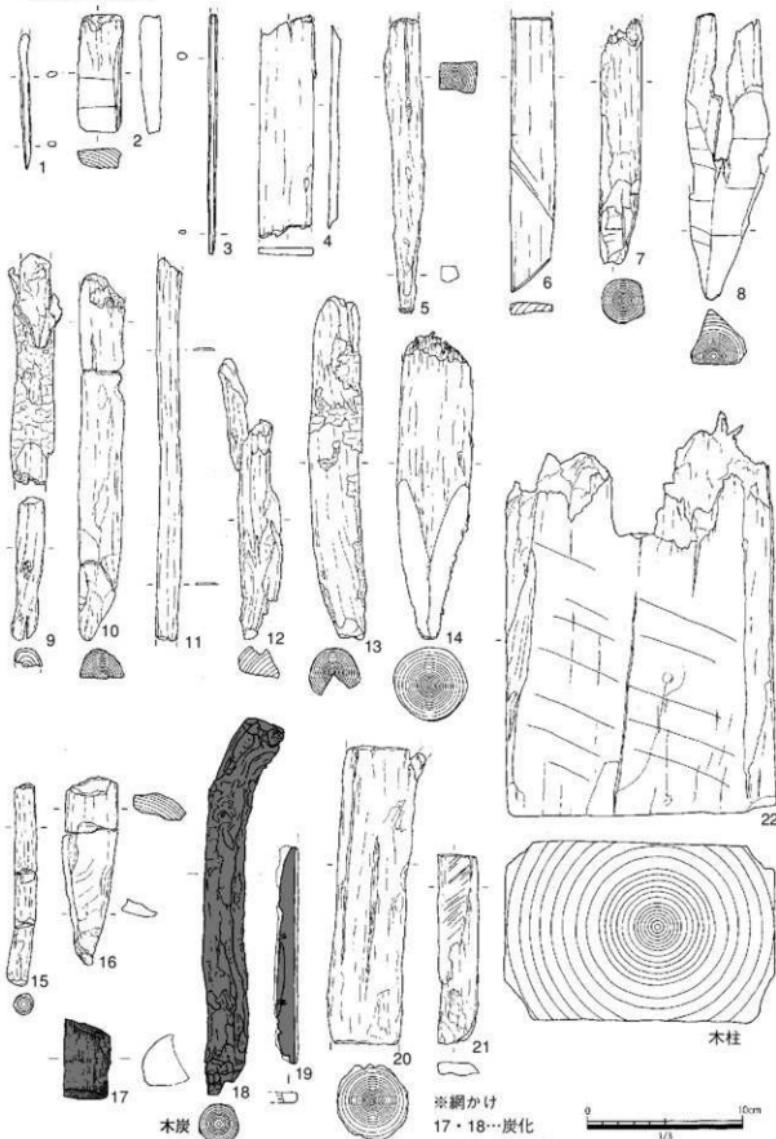


第12図 出土遺物 陶磁器類 (5)



第13図 出土遺物 陶磁器類(6)、石製品、金属製品、錢貨

木製品・木質遺物



第14図 出土遺物 木製品・木質遺物

第1表 陶磁器類觀察表

第2表 特殊遺物観察表

図版番号	種類	地区名	層位	断面	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	石製品	エリア1	VII	石臼	Φ34.7	-	17.7	25000	被熱、窓内に縫口有
2	石製品	エリア2	III下層	基石状石製品	Φ2.2	-	0.8	6.0	黒色
1	金属製品	エリア1	VII	鉄釘	5.2以上	1.5	0.5	2.2	頭部折損・弯曲
2	金属製品	エリア1	VII	鉄釘	9.5以上	Φ1.4	-	13.9	先端・頭部折損
3	金属製品	エリア1	VII	不明鉄製品	0.7	Φ0.7	-	1.3	簡状
4	金属製品	エリア2	I	鉄釘	4.5以上	0.4	0.5	3.0	先端・頭部折損・角釘
5	金属製品	エリア2	II	鉄釘	6.0以上	Φ0.5	-	4.6	先端・頭部折損
6	金属製品	エリア2	II	鉄釘	8.1以上	Φ0.4	-	6.5	
7	金属製品	エリア2	II	煙管	4.6以上	0.7	2.1	1.8	先端折損
8	金属製品	エリア2	III上層	鉄釘	7.3以上	1.2	0.7	7.7	頭部折損・角釘
9	金属製品	エリア2	III上層	鉄釘	6.0以上	3.5	0.5	16.6	頭部折損・弯曲・角釘
10	金属製品	エリア2	III下層	鉄釘	6.6以上	Φ1.1	-	7.9	先端・頭部折損・角釘
11	金属製品	エリア2	III下層	煙管	9.5以上	Φ0.7	-	10.6	
12	金属製品	エリア2	III下層	風铎	6.8	4.2	0.5	18.7	
13	金属製品	エリア2	III下層	不明鉄製品	3.2	1.4	1.5	42.0	
14	金属製品	-	整地層	煙管	6.9以上	1.3	2.8	12.1	先端がつぶれている
15	金属製品	-	-	不明鉄製品	Φ1.5	-	0.9以上	2.0	
16	金属製品	エリア2	擾乱	用途不明	4.7	0.9	0.5	20.8	頭部折損
17	金属製品	エリア2	擾乱	板状鉄製品	10.0	6.0	0.6	193.2	孔Φ0.7mm
1	木製品	エリア1	V土坑	棒状木製品	11.7以上	0.9	0.5	-	木取り不明
2	木製品	エリア1	VII	加工木片	19.0以上	4.6	0.6	-	木取り不明
3	木製品	エリア1	VII	棒状木製品	20.7以上	Φ0.8	-	-	木取り不明
4	木製品	エリア1	VII	板状木片	10.1以上	3.7	2.7	-	追い検目
5	木製品	エリア1	VII	杭	25.3以上	3.2	2.6	-	芯持ち削り出し
6	木製品	エリア1	IV下+VII上+V	板状木片	23.5	3.7	0.9	-	極目
7	木製品	エリア1	杭2	杭	21.1以上	Φ3.7	-	-	芯持ち丸太材
8	木製品	エリア1	杭1	杭	24.6以上	4.8	4.7	-	芯持ち丸太材
9	木製品	エリア2	VII杭3	杭	19.7以上	Φ2.4	-	-	芯持ち丸太材
10	木製品	エリア2	VII杭4	杭	26.9以上	3.8	2.6	-	半裁丸太材
11	木製品	エリア2	VII	板状木片	32.8以上	1.9	0.2	-	木取り不明
12	木製品	エリア2	VII杭2	杭	24.1以上	3.6	2.7	-	追い検目
13	木製品	エリア2	杭1	杭	29.3以上	Φ4.3	-	-	芯持ち丸太材
14	木製品	エリア3	杭4	杭	25.5以上	Φ6.3	-	-	芯持ち丸太材
15	木製品	エリア2	杭7	杭	17.3以上	Φ1.8	-	-	芯持ち丸太材
16	木製品	-	杭5	杭	16.2以上	4.5	2.3	-	板目
17	木製品	エリア2	底	炭	5.1以上	3.0	3.3	-	全炭化
18	木製品	エリア2	底	炭	24.2	Φ2.5	-	-	全炭化
19	木製品	エリア2	底	重箱片	14.0以上	16以上	1.7以上	-	朱漆・墨漆絵
20	木製品	エリア2	木5	棒状木片	25.5以上	Φ6.0	-	-	芯持ち丸太材
21	木製品	エリア2	木2	加工木片	16.2	3.4	1.2	-	木取り不明
22	木製品	エリア2	木3	木柱	34.7以上	23.3	15.4	-	芯持ち削り出し

第3表 錢貨計測表

図版番号	銭種	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内郭外径(mm)	内郭内径(mm)	外縁厚(mm)	質量(g)	備考
1	寛永通寶	22.4	17.5	7.7	6.2	1.0	2.3	
	寛永通寶	22.7	18.4	8.1	6.9	1.0	2.6	
	寛永通寶	23.3	20.8	7.2	6.6	1.4	3.9	
	寛永通寶	23.7	18.9	6.4	5.2	1.2	3.6	
	寛永通寶	23.8	19.4	6.6	5.2	1.5	4.0	
	寛永通寶	24.2	19.6	6.9	6.2	1.2	3.6	
4	寛永通寶	24.4	19.8	7.4	6.0	1.1	3.1	
	寛永通寶	24.6	19.3	6.8	5.9	1.1	3.1	
	寛永通寶	24.6	19.7	7.1	5.8	1.0	3.3	
	寛永通寶	24.6	19.3	7.1	6.0	1.2	3.4	
	寛永通寶	24.7	20.0	6.8	5.8	1.1	2.8	
7	寛永通寶	28.3	21.2	7.8	6.3	1.3	5.5	裏に波文
	永樂通寶	24.0	19.9	6.5	5.7	0.7	2.0	
3	乳元重寶	22.6	18.3	7.8	6.1	1.1	2.3	
	元豊通寶	23.8	19.0	8.2	6.6	1.4	3.8	
9	□豊通寶	24.9	19.0	7.7	6.2	1.2	2.3	元豊通寶か
	皇宋通寶	23.4	18.2	7.2	5.9	1.2	2.9	
8	皇宋通寶	24.7	19.0	8.7	6.5	1.1	3.4	
	聖宋元寶	24.2	20.1	8.0	6.3	1.2	3.2	
6	天聖元寶	24.8	21.0	8.5	7.1	1.1	3.2	
	不 明	24.5	-	-	7.0	6.1	11.9	5枚重ね

第4章 総括

甲府城下町遺跡における本調査地点は、現在の城東通りと遊亀通りの交差点にある。近世におけるこの道は東側からきて本調査地点のところで南側に折れていく甲州街道であり、甲府城三の堀に囲まれた町屋の中となる。京都大学所蔵の絵図では江戸時代初期には折れ曲がらず東西方向に延びる「伊沢（石和）街道」と記されている。まさに調査地点は主要街道沿いとなる。

甲府城下町以前の中世には、甲府城は一条小山として一蓮寺があり、その門前町として栄えていた。この石和街道は一蓮寺につながる門前町への道として機能していたと思われるが、本調査地点においては中世の遺構・遺物がみられないため、門前町の範囲はこの地へは及んでいないものと思われる。本調査地点では現地表下約1mで江戸時代の文化層の下にあたる灰色粘質土の水が湧く地盤となる。この層中は掘り下げていくとわずかであるが古墳時代後期の土器が出土し、また該期と思われる杭もみられた。調査範囲も狭く全体像は明確にし得なかったが、周辺には広く古墳時代の土器が出土することもあわせて考えると、湿地環境にあって水田等の人为的な行為が行われていたものと推定できる。しかし古代、中世と遺構・遺物はみられず長らく空白期となる。

近世には、調査地点より東側の城東通りは八日町、南北に直交する遊亀通りは北側が柳町、南側が柳町二丁目から四丁目までとなる。また西側はすぐに二の堀となり、武家地へ続く八日町口となる。甲府城下に柳町宿が成立したのは寛永十三年（1636）とされる。調査地点での陶磁器類の年代は主に17世紀代のものからが多く見られ、概ね一致する。

エリア1の江戸1期では、狭い調査区域内ではあるが、礎石が配列していることから建物があったことはまちがいない、また石臼炉の埋設によって土間であったことがわかる。石臼はその上面のみが床表面に露出するように埋設されており、またその上面には溶融物が付着し、石臼周辺の床面は焼土化していた。石臼上面の中央にはくぼみがあり、ここからはフイゴ羽口片が出土した。同じ床面上からはこの石臼炉の西側から大量の粉殻とともに木炭が出土した。粉殻の意味はよくわからないが、木炭はこの石臼炉に使用する燃料と思われる。この床面上の焼土を含む土層（VII層）には広くカワラケ片が散在しており、多くは被熱により発泡がみられた。フイゴ羽口片とカワラケ及び石臼からは県立博物館による分析によって金が付着しているのを確認できた。分析結果から、フイゴ羽口片とカワラケからは金粒とともに鉛が検出された。またカワラケと鉛滓、石臼からは銀の付着も確認できた。ほとんどのカワラケには鉛が検出されている。金の純度を上げるためにアリ、金に含まれる不純物を鉛に結合させ、カワラケをるつぼとしてその上で加熱することで鉛をカワラケに吸収させ、表面張力の大きい金が粒となって残るという、いわゆる灰吹き法による精錬が行われていたことがわかる。一般的にはるつぼ内に敷き詰めた灰に鉛を吸着させるが、灰については明確に検出されていない。またるつぼも浅いカワラケが用いられている点で違いがある。ただし、フイゴと木炭によって石臼を埋設した炉において加熱されていることは、精錬としては恒久的施設であって専門的な職人によって行われていたものと考えられる。

甲斐での地方貨幣に甲州金というものがあり、戦国期からその存在が知られている。江戸期に入つては松木家がその製造を独占して担った甲州金座（甲金判屋）であった。初期には甲府城下に集住させて「松木」という極印を打つて甲州金を流通させていた。松木家は『寛永諸家系図伝』あるいは「甲府町年寄山本家由緒書」などによると甲府柳町に屋敷地を拝領し金座を営んでいたとされる。その場所は具体的に明らかではないが、今回の調査地は城下町での柳町に該当し、そこで金精錬に係る遺構・遺物が発見されたことから、甲州金座の一部であった可能性が高い。これまで甲府城の北側に広がる武田城下町での金粒付着土器はいくつか知られているが、江戸期の甲府城下町において甲州金座が営まれたとされる柳町において遺構とともに発見されたことはきわめて重要である。ただし、調査面積が少なく周囲の状況が明らかでないことから、今後の調査に期待されるところが多い。

この金精錬遺構は薄い青灰色シルト層に覆われており、その上層にも生活面がわずかであるが認められた。以後はIV層とした地盤造成層に広く覆われている。この層は黄褐色粘質土で円礫を多く含む掘削した山土を敷き平している。この層中からも陶器類が出土しており、江戸3期とした。大規模な造成であり、18世紀初頭の柳沢治世期におこなわれた城下町の再整備に伴うもの可能性がある。この造成層上にまた生活面があり焼土、炭化材の多く見られるIII層とした江戸4期であるが、エリア2ではさらに焼土をはさんで2細分される。享保十二（1724）年、裏先手小路から出火し城下町が広く被災した享保の大火灾が発生した。以後は幕府財政難も影響して修復が滞ったまま幕末となっていく。本調査区での出土遺物について17世紀代を中心に18世紀代までが主となり、19世紀代についてはほとんどみられない状況と概ね一致している。

近代以降は上水の引き込み、大きな礎石建物、土蔵とともに街道沿いということもあって大きな改変をうけ開発が進んでいく様子がみてとれる。

（抄）甲府城下町遺跡出土金属生産関連遺物の調査について

著名貴彦

1. エックス線透過撮影による重元素類付着状態の確認

各遺物に確認される黒色の点は金属の粒子と見られ、また遺物によっては表面に薄く影の広がりを確認する。中でも、石製品は凹み部分の上側に熔融物が広く付着しており、その部分は透過撮影で影として確認されている。

2. 顕微鏡による観察

各遺物表面には、大小さまざまな金属粒子の付着が確認され、銀と見られる粒子も確認された。

3. 蛍光エックス線分析装置による遺物表面の元素分析

石製品には、凹み部分上部に銀粒子と鉛の付着が確認された。熔融物は鉛が確認されるため、この石製品は炉と見られる。この場合、金と鉛を合わせる合わせ吹き、もしくは灰吹に用いられた炉とみられる。羽口では金粒子と周辺に鉛を確認し、カワラケでは金や銀の粒子と周辺に鉛を確認した。表面に見られるように、ほとんどの遺物は金と鉛を確認したが、1点金と銀の付着をそれぞれ確認したもののや、ビスマスの付着の確認が見られる資料が2点ほど存在した。また、立会で出土した遺物4点のうち中世末の遺物とされるカワラケには、表面付着の不純物としてビスマスやタンクステンを確認した。これは、黒川金山遺跡出土の遺物に見られる不純物と類似している。また、鉛を確認した資料のはほとんどは銅は確認されず、金と銀であった。このことは、金座で製造される甲州金は金銀合金であるためと見られるが、詳細はより検討が必要といえる。

表 遺物への蛍光エックス線分析結果

	県道分				立会	
	カワラケ	羽口	鉱滓	石製品	カワラケ	立会
合計	11	2	1	1	2	2
金粒子付着	11	2				2
銀粒子付着	1		1	1		
銅付着			1			2
鉛付着	10	2	1	1	1	1
ビスマス付着	2		1			1

注) 当分析結果については一部を省略しており全文を掲載しているものではない。



エリア1 基本土層 北 東面



エリア1 北 完掘 北側から



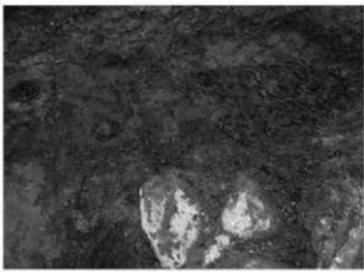
エリア1 北 江戸1期 完掘 東側から



エリア1 北 江戸1期 完掘 南側から



エリア1 北 石臼 江戸1期



江戸1期 初殻層



江戸1期 初殻層 拡大



エリア1 調査風景

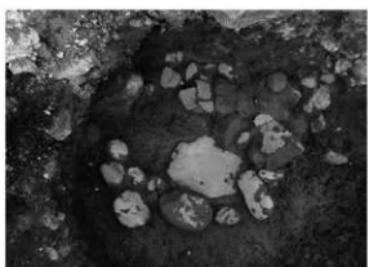
図版 2



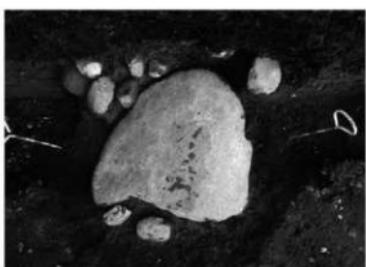
エリア1 南 江戸1期 磁石 南から



エリア1 南 江戸1期 磁石 北から



磁石4 江戸1期



磁石7 江戸1期



磁石9 江戸1期



磁石8 江戸1期



木柱 江戸1期



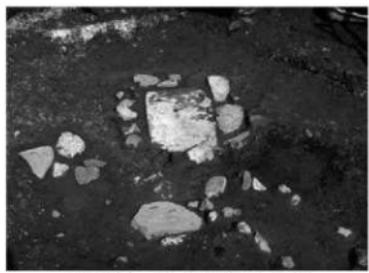
エリア2 東 調査風景



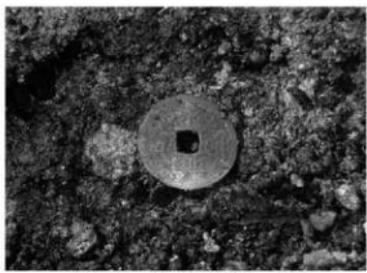
エリア1 北 江戸4期 全景



エリア1 北 江戸4期 完掘



エリア1 北 江戸4期 土坑



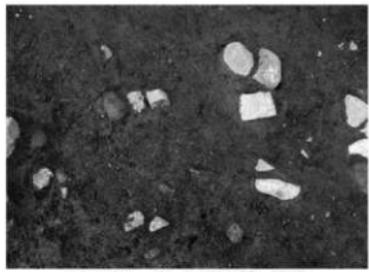
エリア1 北 江戸4期 古銭



エリア1 南 江戸4期 全景 北から



エリア1 南 江戸4期 配石

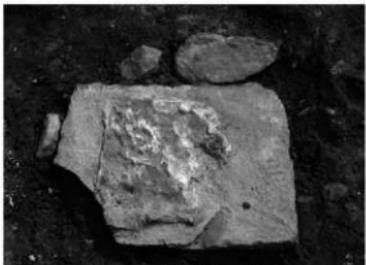


エリア1 南 江戸4期 配石



エリア1 南 江戸4期 杖1

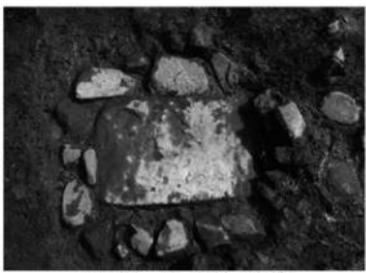
図版 4



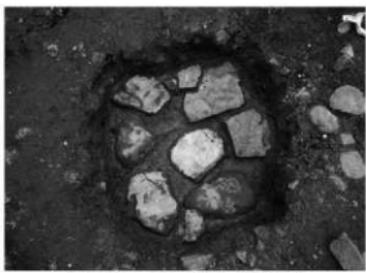
エリア1 北 近代 磚石1



エリア1 北 近代 磚石1下



エリア1 北 近代 磚石2



エリア1 北 近代 磚石2下



エリア1 北 近代 磚石3



エリア1 北 近代 磚石3下



エリア1 北 近代 上水1



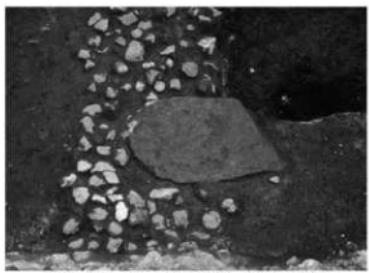
エリア1 北 近代 上水2



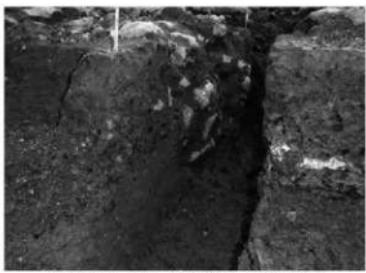
エリア2 東 完掘 南から



エリア2 東 江戸4期 磚溝



エリア2 東 江戸4期 磚石・磚溝



エリア2 東 江戸4期 磚溝土層



エリア2 東 古墳時代 杭



エリア2 西 完掘



エリア2 西 木製品集中



エリア2 西 土層

図版 6



陶磁器類（1）



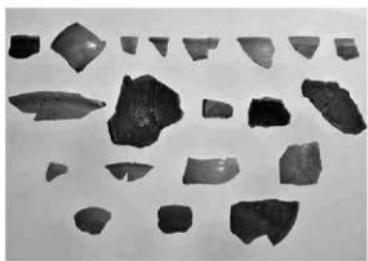
陶磁器類（2）



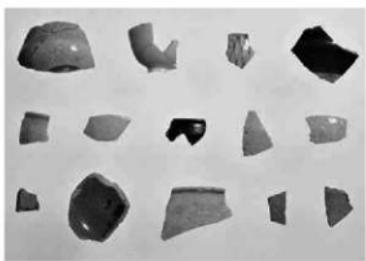
陶磁器類（3）



陶磁器類（4）



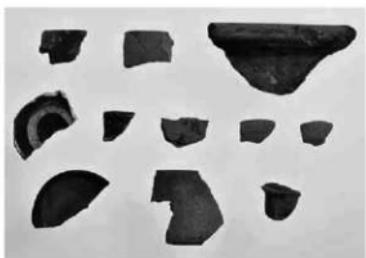
陶磁器類（5）



陶磁器類（6）



陶磁器類（7）



陶磁器類（8）



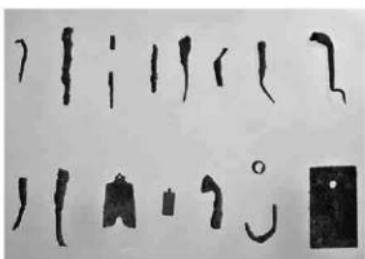
陶磁器類 (9)



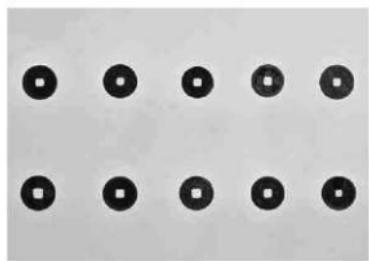
陶磁器類 (10)



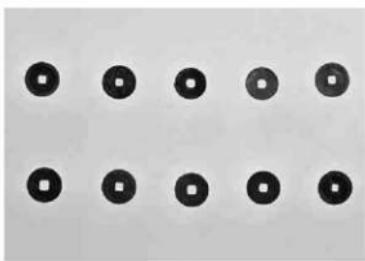
陶磁器類 (11)



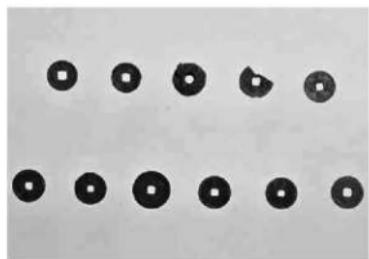
金屬製品 (1)



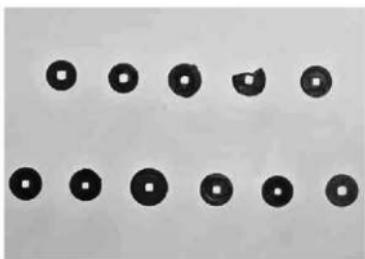
錢貨 (1) 一表



錢貨 (1) 一裏

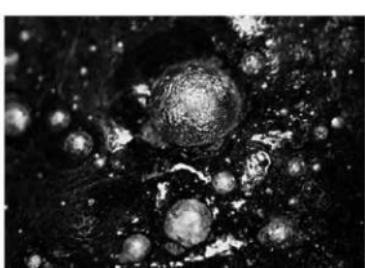
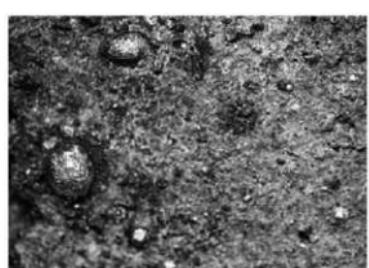
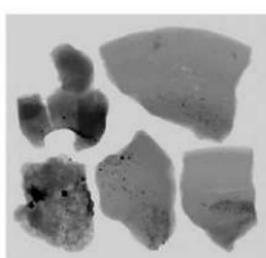
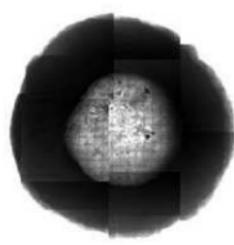
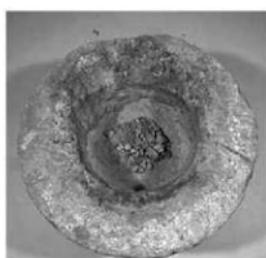


錢貨 (2) 一表



錢貨 (2) 一裏

図版 8



報告書抄録

ふりがな 書名	こうふじょうかまちいせき 甲府城下町遺跡							
副題	都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	288集							
著者名	今福利恵、御山亮済							
発行者	山梨県教育委員会、山梨県県土整備部							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016							
発行年月日	2013年3月25日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
こうふじょうかまちい せき	やまなしけん こうふじょうかまち おうちじちゅう おうちじちゅうめ よんじょうめ	19201	253	35° 39'3 9.1"	138° 34'20 .8"	平成23年 10月14日～ 11月14日	90m ²	都市計画道路改築
甲府城下町 遺跡	山梨県甲府市 中央二丁目、 中央四丁目							
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
甲府城下町 遺跡	集落跡	近世	建物礎石、 金精鍊遺構	陶磁器類、 金属器類	江戸時代初期の金精鍊に係 る鍛冶遺構			
要約	甲府城下町遺跡うち、堀に囲まれた町屋にかかるところである。江戸時代の遺構は概ね17世紀代を中心として、地盤造成層上およびその下にみられた。地盤造成層上では礎石および土蔵基礎が陶磁器類、古銭、金属器類とともにみつかった。地盤造成層下からは石臼を伴う金精鍊遺構がみつかり、出土したフイゴ羽口やカフラケに金粒が付着していた。城下町での甲州金座に係る遺構と思われる。							

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第288集

甲府城下町遺跡

都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日 2013年3月25日

発行日 2013年3月25日

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曾根町923
TEL 055-266-3016

発行 山梨県教育委員会
山梨県県土整備部

印刷 株式会社三愛印刷

